

徒花と宿痾

鷺尾蒼太

アラム代わりの投薬機。

泥の身体は生き返る。

吊り下げられた延命用のクラゲ。

逃げないように骨を持って立ち上がる。

虚を飾するはペーストされた成分表。

匙の音に空っぽの自分が反響する。

時報代わりの投薬機。

桜のあの子がやって来る。

君が降らすは花の雨。

情動感染からは逃れられない。

虚を偽るは花曇りの身体。

潜む芽が空疎な私を侵食する。

チャイム代わりの投薬機。

コイルの中で夢を見る。

潜性の下に生まれた二人。

葉桜の根本で仲良く眠る。

虚を言うことはただのゲネプロ。

萌芽した花笑みがあなたに重なる。

役目を終えた投薬機。

寒海の淵を一人漂う。

残花に染まった頭蓋に咲く蘭。

あなたの心臓に天蓋花が狂い咲く。
今日も散りゆくあの子は夢の中。
名残の花は優しく蝕む私の病理。

万華鏡

野口珠菜

きらきらした白い筒
三枚の鏡板
ビーズ一杯
赤い丸
金色の縦長
そこに
硝子のいし
つめて蓋して
覗き込む
まわしてもまわしても
新しい
目まぐるしい万華鏡
金色の六角^{ろっかく}
赤が似合う花
いまは青空のいし
変わる景色
ふふふふ
あ、ゴツリ
まわるまわる
土の上
ひろってぬぐっても
とれない茶色
気づかない間に

うす汚れた万華鏡

あれ？

なくなった？

そこにあつたいし

まわしてもまわしても

見当たらない

どこにいったの？

蓋をあける

ビーズはあるのに

いしはない

代わりにあつた

たくさんの透明

触れば痛い

危険な万華鏡

それでも蓋して

まわすまわす

捨てればいいのに

それを覗く

あれ？

こんなのいれたつけ

たくさんの虹

目を奪われる

ああ、そうか

変わらずあつた

無数のいし

最高ね

雨の駅のホームで

「歩きスマホはやめてください」

男の声がした。

男の目には女が映っていた。

女は答えなかった。

「聞いていますか」

また男の声がした。

女は迷惑そうな顔で男の顔を目に映した。

「歩きながらいじる必要はありますか」

「危ないとは思わないんですか」

「何かあってからでは遅いんです」

男は女に近寄って捲し立てた。

女は答えなかった。

女は未だ、携帯を弄っていた。

「答えてください」

男は語気を強めた。

女は何も言わなかった。

周りの人々は、揃って女のいる方を見ていた。

まるで異常者を見るような目だった。

女は、ばつが悪そうにその場を立ち去った。

女は最後まで何も言わなかった。

周りの人々は、未だに異常者を見るような目をしていた。
女が立ち去った後も、同じ場所を見つめていた。
男の姿も、既にそこにはなかった。
誰もいないその場所には、誰もがいた。
有象無象として、誰もがそこにいた。

オイコノミア

松島和志

ママが食事作らなくなる

僕はひとりで食事を楽しむ

そのときはじめて、ママと言える モモとかナナとか女の名前として

ママが歯磨かなくなったら僕はブラシ口に突っ込む

そのとき、僕は初めて子供を育てる

ママそのとき涙が出る

あつい涙が流れていく

ママ、飴舐めなよ

歯磨いたばっかりだけど

ママはきつと名前知らない

ママという名前しか知らない。

だから

偽物のアーチをくぐってはいけない

砲台が鳴く

しあさつての方向に

ライオンが鳴く

しばらくして鳥も鳴く

美しからざるものたちは町を追われて歩き出す

まるで死に場所探しのように。

僕はママではない女に花を買う

そのときはじめて、ママと言える メメとかネネとか女の名前として

僕はいま切実な花を小脇にかかえ明け方の砂漠を歩く

這う虫のように

吸う息を数える。

僕は泣いていた ああ、オイコノミア！

僕は彼方に駆け回り、ほとぼしる唾液は砂に沈み込んで染みになった
倒れ込んでいた

僕はむくりと立ちあがり、肩を空に見せつけた

僕は室に根を張り正確にママをみごもる

そして蛹のようにただただ時間を待っている

遠くへ 規則正しく

暖かな木琴の音になる

交差する脚の間に石が地表には輝いている。

青い　さんびか

大矢詩季

アルコールが

やさしい目をして見守っている

卓

哲学も詩も

彼らにはかき混ぜられて

渦

何者でなくても

登壇が許されるから

快

熱を帯びて

絵巻になった

夢

このままきつと

とどまる気がしたのに

夜

アルコールは

やさしい目をして見守っている

卓

(雨)

杉山心

プールの底にも雨が降る。

ことに、気づく、どこにもルビのない過日に、

水とのさかいめを探す日に。

さらば、翠いろの指先は詩に向かない。

会談の影に玉虫の羽を探すような悲しみと、

ももいろの花のつま先が まだ道を打っている頃に、

僕はいろいろの孤独であり、

晴天。

刈田真緒

あなたはやわい石を埋める　朝日がとおい線路の下で
マール模様に淀んだそれに　そそげないでいる土の傍ら
だれもがそうしていたことに　ゆらゆら気づかないふりしてた
双眸を細くするたびに　あなたはすこし彫刻／になる

あなたはやわい石を埋める　それだけの色
ばきばき

ラップ音／に似た／振動がして、

それは一度や二度ではない

うねって、
細い糸

貼り詰めて

られて

<

.....

（刻まれる音はいやおうなしにすべてを加速させるもので、
 そういえばずっと前から鳴っていたのだとようやく気づいた！）

音がきこえるずっと前から

ゆりかごは細い糸で編まれた

たっ
たいま
足元を覆っていった／だけ

音がき――えるずっと前には

しじまの石を愛でて――られた

それは灰色――うつくしさと

――おらかな系統でこ――していた・祈――

「抱きしめることしかできなかった、ってやばい、ね」

あなたはやわい石を埋める。いつも持ち歩いていたそれは、平面になり、踏まれる。からっぽのあなたにはもう、なにも入らなくなったけど、透けるほど白いこの糸は、歩行を楽しみにしてくれた！（と、わらった）

たより

円山璃保

僕は寝起きの重たい腕で豆腐のような固形石鹸を掴もうとしていた。しかし石鹸は何度も僕の手から滑り落ち、ついに掴めなかった。気を取り直して自室のクローゼットへ移動し几帳面にあしらわれた漁網のようなサマーカーディガンに袖を通す。頭上の壁掛け時計をみると、キャンパスの隅、公道に隣接する棟で行われる一時限目の講義に間に合う出発時刻が迫っている。僕は家を出た。通勤快速列車の定員を超えて呼吸する触れ合う肩の熱伝導にこの星が纏う目的やよそよそしい安堵だけは奪われない仕事なんだぜ、と教わりながら保険会社の車内広告を見つめた。

「チャイムが鳴りましたので授業始めます。」

プリントの束からそれを一枚ずつ引き抜いて、隣の人に回していく。ぴーろーりーろー。早い者勝ちではないので取り合わなくてよい。

「全員、回りましたね。今日は皆さん発表救急車が通りますですね。ぴーろーください。」

「え？」

突然、周波数が乱れる。でも、安堵は奪われないんだぜ……。

「外で、通ります救急車が通りますが。」

どうやら窓の外を走る救急車から放たれた言葉のにおいとかげが、教室の換気扇を引っ掻いたため空調が乱れたのだった。

「外をぴーろー」

「外にりーろー」

「外だぴーろー」

授業の進行は一時中断され、ぴーろー窓の外へ話が展開されたもののサイレンに上昇した心拍数でうまく聞こえない。りーろー聞き取れない、のは、いつもだ。これって、四捨五入すれば、言葉をいまだに読み取れない僕にとっちゃ、常だぜ。

でもでも、この星は、安堵は、奪われないんだぜー。

「さて、では気を取り直してね。今日の発表者、一人目、お願いします。」
一人目は、僕だぴろ。

「はい。ぴーろーりーろー救急車が通ります！救急車が通ります！知らない、どうして言葉があるのかわからない、自分が知ろうとしているものは何なのかわからない、どこの教室に行けばいいのかわからない、ぴーろーりーろー僕は政治になっっている、僕は言葉になっっている、肌を何周も剥いだのに触ってくる、いやそもそも内側にあった色。みたいなツラしてこっちを睨む華奢なリンドウ。八つ当たりしてごめんね・すいすい。ぶち。なぐっちゃだーめよ。運が悪いだけよ。運が良いからしゃべれるよ。赤ちゃんのすべてが、ゆるされたんに、にこにこぶーぶ。ぶーぶがいくよ（重い物体を速く動かすのは危ないよ）（人殺し。ハイウェイ人殺し！戦争NO！ノーモア！辞書は引いたら盥回し食らうで。知・って不可逆なんやね。モザイクがくるまれてる、永住権、ハンドル握れへん？しとのことお、だまして、ゆるされるか。言葉の分解お願いします。とんとん。じゅー、じゅー。戦争NO！車でGO！ぴーろーりーろー」

「はい、ありがとうございます。」

帰宅してすぐ、手を洗おうと向かった洗面台で、固形石鹸の側面に髪の毛がぬらりと張り付いているさまを見た。僕はこの髪を摘まみ取るべきなんだろうか。

うめたてち

山崎美花奈

みんなが green land に住むと口々に。

わたしがタイヤに乗せられて、すべる大地の真下には、虫達の溶鉱炉。そのまたお腹の中には、炭疽が小さく咳込んでいる。よそから運び込まれたやまいけどもが、肩よせはげまし息をする。乾いた咳は、固い表皮をくぐり抜け、黄色く煤けて吹き付ける。

(どこかわるいの)

(つちがあわないんだ)

(つちってだあれ)

(ああ、われわれがつちなのか、はは)

あなたは green land に住めと口々に。

タイヤは回る、きらきらがやく塵の上を走る、むこうの永久凍土はほら、いまにも空までとどきそう。

あんなつやつやの凍りの中にも、小さな生き物、見つめる先はゆめみたいなふいよるど。凍りの中は暖かい、お腹に灯りを灯している。

(またよそ者が来た)

(みんなよそ者じゃないの)

(よそ者は運河のむこうにいるよ)

(わたしたちよりも前からね)

足元がおぼつかない……

green land に住もうかな。

わたしのタイヤが大地か塵かをさらさらなでる、黄色く煤けたまちなみは、砂糖工場があった跡。その先に、バラック、バラック、バラック、ひとつ挟んで、つめたく大きな都市開発。耳の後ろの、脳髓の近くから、わたしの病気の匂いがしている。

みんなみんな、仮住まい。

（少しの間、住むだけだから）

（本当にそうかしら）

（凍りのようにかためられ、何十年もたったのよ。誰もよそ者にはなれないわ…
…）

音楽の行方

赤津将大

あの「字路を

右に曲がると風の遊歩

横顔はたくさんを後ろに流した

どこもかしこもあまりに透けて

風が泣いた日

風は物を貫いて 表情もなく手荒に消し

白 黒 青 の盲いた線ばかりがあちこちで蠢いて

そのなかで遠く

彼はやさしく立っていた

砂漠を柔らかに裏返す

赤い風が吹いた日

生々しいのに心地よく

通過すると 彼は秋みたいに削れていた

そこに確かな季節はなく

口に残る鉄の味は

さっぱり頭上へ霧消した

世界が窪みをめがけて反り返る

すり鉢状の頭上が重く

右に左に天井よりも大きな背中がある

汚い意図や目的の純粋な歪みが

目の前で人体に浮かび 数え挙げられ

食卓で口に物を運ぶ自分が恐ろしく気持ち悪くて

ずらした椅子が倒れる

自分だけは情けを持って美しくありたいと願う余裕もなく
背中を捨てようと　　どんだん道を歩き

冷たいコーヒ―で想念のすべてを飲み下しながら

どんだん道を歩き

緞帳が体を真つ二つに引いて

風が明けると

遠くのほうにぼつんと

動物たちの深い茂みで

一番汚くわたしが倒れていた

風の街

あの「字路を

左に曲がると水と星の幻が

道に　電柱に　車に

人に　木に　風に

宿る

わたしがたくさん書いた土地

遙か遠くから広大に聴こえる

石琴をうち鳴らすカラスの姿

ひとはそれを昔と言うだろう

薄暗い緑の窪みで

髪は暴れて　タキシードを乱して

青年がピアノを弾く

すでに顔はなく　天才である

ひとはそれを嘘と言うだろう

この脚は地面の筋肉を感じている

水と幻夢の気体でできたこの星は地球ではない

星が瞬きし終えた後に

この手は白く地球の光でできている
ふっと揺らすと

第七世界から届いた光がその手を再構成している
知っている この白い手はわたしの手のまま
母から生まれ

幾多の穢れと美しい心を知り
強く消えながら うっすらあらわれる
孤児たちの全いのち

わたしはこの手をまだ伸ばす
わたしはこの眼をまだ開く

知っている わたしは巨人ではない

一度 わたしよりわたしに似たやさしい影を確認する
わたしは使い古された一人称ではない

だから恐い
だから寒い

それでもヒトを離れて

風より透けていたい日はある わたしを
広大なわたしは永遠に見続けてきている
照り返す

星の街

この「字路を

今日はどちらに曲がろうか

それとも塀を越えてみようか

ここからそれほど遠くないところで
わたしが迷っている

川について〈i〉

齋藤礼旺

むかえる箸の手つきで

陰影が照らすのは

男たちの喉笛ばかり

捨てるために仕舞いこむ

苗字や肩書きがあるとして

娼婦のささやき声に

運ばれてくる麦酒は

どうも胡散くさく目の前を

上書きしてしまつてかなわない、

川だ

敗戦がよぎる、というのは

紛れもない建前であつて

この頃の私は

川の支流に幼い喉を向け

隣街かそのまた先にそびえる

尖塔を審美するのに夢中だった。

無数の脆弱に足をとられつつ、

それが身体か藻のしわざか

娼婦というものを未だ知らなかったから

水面だか鏡面だかに顔をざんぶと浸し

漂流したセピヤの瓶へ関心に移せば

後は時系列に済んだことだった

川をずいぶん飲み込んだ子供だ
青白い腹が私と尖塔の間にある
非番の水夫が胸を圧していくと
すんでのところで川は水に還り
子の輪郭は急速に取り戻される

そうして近頃の男たち

あの胸骨のようなネク・タイは
麦酒に流れたきりもうわからない

八月随

浜田空

風は心を逆撫で。毛羽立った枯野の精神一本一本の立ち様がコンパスに。針先から負を纏った光線を僕から伸びる影として現在に統合した。雪だるま式で積み重なるデマゴーゴスの出鱈目廃墟。手触りや色々は翳る気持ち。闖入した闇と今を建築する。その向けられた無機質な針の穴に静脈を通すことは可能なのだろうか。職人は生涯を払ってもわからないと笑った。僕も石ころ感情蹴飛ばして廃墟を東京に笑い飛ばした。

うだる夢の滴りはやがて石を穿ち川となる。賽で君は歪んだ札束を積み格別のレットルを身につけ商品になった。何が重なって餓鬼の植えた畑に葉が実る。僕は地獄を私物化する。疎開するようにヒッチハイクをした。出会う人皆生きていた。でも戦場は地獄は僕は今も終わっちゃいない。

自由すぎて何もかも可笑しい。全ては布上の物語。赤子は羊毛でござわと僕をくすぐる。麻の時間は世界の毛羽立ちを愛苦しく。絹っぽいドキュメントは艶やかな戦場をかき消して。感じ始めれば有り余る地平に情緒はふわりと崩れ瓦礫がやさしく僕をくるむ。

吹いて飛んだ繊維の目を覚まして血を注ぐように陽を編む。僕より先に目を覚ましていた感情に僕をかたどる。背負うにはあまりに昏い世界を纏う。投函された手紙を朝焼けに燃やした。蓬々と立ち上がる感情が白けた未来の頬をマーマレード色に染め部屋に差し込む。その朝があまりに美しいので体を貰かせてそこで終わりにする。

*早稲田大学（教育学部）

星に降る音

米司花音

雷がいくつも落ちてきました

そのあとに大きな雨が降ってきて

空は茶色く濁り、川も同じようにぐるぐると

蟬の声を上回る大きな音が地上を満たすと

騒ぎを聞きつけた夜が急に顔を覗かせて、楽しそうに人々を呑み込んでいきま
す

キー、キーとブレーキの音

窓外を眺めながら、為すすべもなく、わたしは揺られていて

ドアが開く、また閉じる

流れ込んで、閉じ込められた空気に線香の匂いが混ざりました

庭先に残る灰の跡

冷たい御影石への恋しさ

花火の落ちていく時間

荒れ狂う海の震動

灯台の光に焼かれるカメメの眼

モールス信号をわたしは解しませんから

掌に光の弾ける感触を楽しみに

鮮やかな緑濃く蔽い茂る黄金の丘を目指しましょう

眼下の夕陽に染め上げられた街に

思わぬ鋭い風が吹くものですから

細かい砂が月から落ちてきて

いとも簡単に、すべてが埋もれてしまいます

どうしよう

こんなにも淋しくて悲しいのに

こんなにも暑くて苦しいはずなのに
いまだはこの音を、とても穏やかな気持ちで聞いています